

# 参加しませんか？

# 気づく×学ぶ×つながる！PTA家庭教育学級

## ◆ 家庭教育学級ってなに？

家庭教育学級とは、乳幼児期から学童期までの子育てにおけるさまざまな課題に対して親同士が話し合い、知恵を出し合う中で、気づきを得ながら学び合う場です。家庭教育学級には3種類あり、ここでは区内幼稚園・こども園・小学校・中学校にて行われているPTA家庭教育学級についてご紹介します。

台東区の  
家庭教育学級  
イメージ

### PTA家庭教育学級

幼稚園・こども園、小学校、中学校の保護者対象。地域特性を踏まえた学級内容にするため、各PTAが企画・運営。

### 保育園・こども園 対象の家庭教育学級

保育園・こども園(長時間保育)保護者対象。共働き家庭が抱える子育ての悩み等をテーマに、保育園の枠を超えて保護者が学び合う機会として、生涯学習課が企画・運営。

### 乳幼児 家庭教育学級

0～3歳児の保護者対象。乳幼児期の子育て等について学び合う機会として、講座の企画・運営を地域で子育て支援等の活動をする団体に委託し、実施。

## ◆ PTA家庭教育学級とは

PTA家庭教育学級とは、同地域・同年代の子供を持つ親同士の学びの場です。各PTAで企画・運営しており、平成29年度は延べ約3,200人の方にご参加いただきました。

## ◆ 具体的にどういことをやるの？

まず、学びたいテーマ選びから始まります。次に助言講師\*による話題提供を踏まえて参加者同士が話し合いを行います。「悩んでいるのは自分だけではない」と共感したり、自分だけでは気づけなかった考え方や解決方法に気づいたり等、より学びを深めることができます。



学習の様子

\*助言講師…専門的な知識を参加者に提供し、話し合いをスムーズに進行するための助言を行う人。

## ◆ ご参加お待ちしております！

同じ園や学校の親同士で学ぶことができる貴重な場です。ぜひ、PTA家庭教育学級をご活用ください。詳細については下記担当までお問合せ下さい。



年度初めに行う運営研修会の様子

## 活動の一例



### 【台東育英小学校PTA】

スマホやSNSに悩む保護者が多いことから「スマホ時代の子育て」を学習テーマに、佐久間茂和氏(教育支援館学校教育情報室)を助言講師に迎えて活発な話し合い学習が行われました。



### 【大正幼稚園PTA】

「多様性を受け入れる学校」を学習テーマに、大辻隆夫氏(大正小学校副校長)を助言講師に、異なる文化を受け入れることについて考えました。幼稚園OGの皆さんが、会場後方で未就園児の見守りをされています。

●お問合せ先：生涯学習課社会教育担当 ☎5246-5821

連載  
子供に聞かせたい、  
こんな話  
その26

日本のカーネギー

佐藤 慶太郎 | 前編

こころざし高く

前文略

慶太郎は、一八八八年(明治元年)九州の福岡県北九州市(現在)に生まれました。身体が弱く「病気の問屋」と言われました。特に、胃腸が弱く、内気で、よその家に使に行っても、喋でじっと座っているだけでした。しかし、見かけと違い意思の強い子でした。

学業は優秀でしたが、家が貧しく、県費(県の費用)で学べる師範学校を受験することになりました。しかし、自分は教育者に向かないと考えた慶太郎は、自分で学校を勝手に変えて私立の学校を受験しました。親には叱られました。叔父、叔母など五軒の家から学費を出してもらったように説得して学校に通えるようになりました。のちに、この人たちは十分なお礼をしています。このような機転と実行力は父親譲りと言われています。

一八八六年(明治十九年)、福岡県立英語専修館(しゅうゆうかん)に入学します。しかし、二年目の時に、東京で生活する従兄弟から話を聞いた慶太郎は、これからは東京に行かないと学問に遅れると考え、東京に行く決心をしました。この時も家が貧しく学費が問題になりました。しかし、慶太郎は、修献館の時と同じように、親戚から学費を借りて、東京の学校に行くことになりました。

東京では明治法律学校(現明治大学)で法律を学びました。ここで学ぶと、卒業後は、裁判官・判事・検事になることができます。しかし、元々病弱だったため病気が戦いながら勉強することになりました。なんとか卒業はしましたが、裁判官などの道はあきらめなければなりません。

失意の中で郷里に帰った慶太郎は、石炭商の番頭を薦められました。番頭と言っても店

の娘と結婚して婿に入るのです。石炭の取引が有望な商いだと感じた慶太郎は、これを引き受けました。仕事についた慶太郎に商いを教えたのは、妻の俊子です。俊子は、十代の頃から帳場に座り、店を仕切るほどになっていましたので、石炭業についてはとても詳しくはなりました。慶太郎は、妻の俊子に商いを学んだのです。結婚したときの慶太郎は、妻の俊子に「栄をしようと思わないこと」「給料を自当に働かないこと」という約束をしています。給料よりも、経験や信用を得ることが大切と考えたのです。

当時の石炭商は、買って売るだけでよいという考えでした。石炭の採掘現場や船や汽車で運ぶ出す方法については、知る必要がないと思っていたのです。しかし慶太郎は、石炭がどのように採掘され、どのように運ばれているかを自分で見て調べて歩きました。このため、落ちていた石炭を見ただけで、この山から掘り出されたのが分かるほどになり、「石炭の神様」と言われました。慶太郎は、独立して自分の店を持つことになりました。



【出典】育藤泰嘉 佐藤慶太郎伝 東京府美術館を建てた石炭の神様 石風社 2008年  
【監修】佐藤慶太郎顕彰会代表・筑波大学名誉教授・星のおじさま美術館学芸員 育藤泰嘉  
※出典を参考文献として文章を構成しています。  
中学校1-3年生用こころざし教育副読本に掲載  
お問合せ先：教育支援館  
☎5246-5921